

## アメリカの中等教育について

加藤 たまき(大学1年)

私はこの夏、人生で最も充実した時間をトランス生と柏生のみんと過ごした。トランスでの19日間は、間違いなく私の価値観と将来を大きく変えた。この報告書では、私が現地の学校を訪問して知った、アメリカのリアルな教育について述べたいと思う。

私は大学で教育心理学を専攻しており、将来は教師になりたいと考えている。幸運なことに、私が滞在した第二ホストファミリーは、母が元教師、娘・息子が現役の教師をしている。ホストファミリーとのフリーデイに、私は息子さんの職場である現地の中学校を訪れることができた。

その学校はトランスの近くのランチョ・パロス・ベルデス市にある「MIRALESTE Intermediate School」という公立の中学校だ。まるで日本の大学のキャンパスのように、広い敷地に教室や学食、図書館などの建物が点在していた。一年を通して雨がほとんど降らず、気温も快適で過ごしやすいため、各施設が一つの建物内に集約されていなくても困らないだろう。

話を聞いて一番驚いたのは、アメリカの50州でカリキュラムや教科書が異なり、教員免許も州によって異なるということだ。つまり、カリフォルニア州の免許を取得した人は、他の州で授業を教えることはできない。日本では文部科学省が定めた統一されたカリキュラムに従って授業が行われているので、州によって授業の内容が異なるのはかなり衝撃的だった。

また、この地域もトランスと同様に日系人がとても多く、クラスの生徒の10人に1人が日系人だった。中学からは私たちが英語を学ぶようにスペイン語の学習が始まり、高校からはさらに学ぶ外国語の選択肢が広がり、日本語、韓国語、中国語などを選択できるそうだ。

今年度トランス生の一人に日本語で日常会話を十分にこなせる生徒がいるので、普段、どのような勉強をしているのかを聞いた。彼は4年前から日本語の勉強をはじめ、学校では毎日、日本語の授業を受けている。はじめは、ひらがなやカタカナなどを覚え、上級クラスになると文法や漢字などの勉強をするそうだ。他のトランス生も高校で日本語の授業を選択している生徒が多く、幅広い選択肢の中から外国の言語を学べるのはとても魅力的だと思った。

他にも日本との違いを感じたのは、時間割の時間設定だ。授業は早い曜日で14時、遅い曜日でも15時には終わる。これは日本と比べるとかなり緩やかなカリキュラムだ。ちなみに、登下校は約70%が親の送り迎えの車、残りの30%がバス通学だそうだ。

放課後は部活動をしたり、スポーツや音楽系の習い事をしたりする生徒が多いという。日本のように塾に通う生徒は少ない。アメリカでは高校まで義務教育なので、日本のようなテストで決まる高校受験がないことも大きいと思うが、全体的にカリキュラムに余裕があり、日本の中学生よりものびのびと学んでいる印象を受けた。

日本はアメリカに比べると、入試対策に偏った詰め込み型の学習だと思う。もっと、個人の興味関心に沿った学びができればいいのにと感じた。日本の教育制度を見つめ直すきっかけになった貴重な体験だった。

最後に、このプログラムに携わってくださったTSCAメンバー、私たちを選んでいただき最後まで支えてくださったKIRAの方々、ホストファミリーの皆さんをはじめ、サポートしてくださったすべての皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございます。



「MIRALESTE Intermediate School」  
の校舎の外観 2024/8/17 撮影